北海道師範塾
「教師の道」
塾頭通信
第517号　平成25年3月26日

中退率

３月は巣立ちの季節です。

幼稚園から大学までいろんな卒業式が行われていますが、子ども達が成長し、新しい世界へと飛び立つ姿を見る事はとても嬉しい事です。

ただ、中には、折角入った学校を途中で退学し、卒業という晴れの日を迎える事が出来なかった子ども達が少なくない事も、忘れてはなりません。

先日、「都立高で中退減、不登校は増」という日本経済新聞の小さな記事（３月４日付）が目に留まり、それでは北海道はどうなのかと調べてみました。

その前に、東京都の状況を見て置きたいと思います。

報道では、２０１１年度の都立高校（全日制・定時制）の中退者は３３３７人で５年前の０７年度（４６９４人）と比較すると１３００人以上減少したが、不登校の生徒数は、逆に０７年度の３０５０人から４２２０人と１１００人余りも増えたとしています。

こうした変化について、東京都が進めている「不登校生らを受け入れる為のチャレンジスクール」や「基本学習を重視するエンカレッジスクール」の設置を進めている事などにより「これまで中退していた生徒が在籍を続けられるようになっている」という都教委担当者の声を紹介しています。

それでは、北海道の状況を見て行きましょう。

表１　中途退学の状況

年　度	中退者数	中退率
平成１９年度	２，３９０人	２．０
平成２３年度	１，７３５人	１．６

表２　不登校の状況

年　度	不登校者数	不登校率
平成１９年度	７０３人	０．５９
平成２３年度	８３３人	０．７５

以上が北海道の概況ですが、これらを見ると、中退者は東京都とほぼ同じ様に減少している事が伺えます。一方、不登校生徒については、増えてはいますが東京都程ではないというところです。

子どもの数の総体が減少している中、中途退学者の絶対数が減るのは当然といえ

ますが、中退発生率自体も減少傾向にある事は歓迎すべき事です。

一方の不登校については、平成１６年以降減少傾向が続いていましたが平成２１年度以降増加に転じています。平成２３年度は実数こそ前年度に比べ２０名減少しましたが発生率は変わっていませんので、今後の動向に注目する必要があるでしょう。

また、不登校について特に私が気になっているのは、下表の様に、全日制の生徒は減っているのに定時制の生徒の不登校が大きく増加している事です。

年　度	全日制	定時制
平成１９年度	520 人（0.46%）	183 人(3.39%)
平成２３年度	443 人（0.4%）	390 人（7.3%）

このままでいくと、生徒数が圧倒的に少ないにもかかわらず、定時制の生徒の方が全日制の生徒よりも不登校の生徒が多いという事態になりかねません。

子ども達は、折角入った高校なのに、何故中途退学したり、不登校になったりするのでしょうか。

北海道教育委員会における平成２３年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、中途退学の理由として大きく上げられているのは、

・学校生活・学業不適応　　・進路変更　　の二つです。

また、不登校の原因については、

・無気力　　　・不安など情緒的混乱　　・いじめを除く友人関係を巡る問題
・学業の不振　・意図的な拒否

などとなっています。

不登校に至る原因は、人によって様々だと思いますが、特に、定時制の生徒の場合は、小中学校の段階で学ぶ事の楽しさや達成感を経験することなく高校に入って来た為に、高校生活に対しても、そもそも夢や希望を持てない子ども達も多いのではないかと考えられます。彼らが胸の奥に秘めている挫折感は、名状し難いものだろうと思っていますし、夢や希望が持てない中で、学校生活だけを続けろというのは酷かもしれません。

道教委は、一人一人の子どもに寄り添った支援を行うため、スクールカウンセラーの拡充やスクールソーシャルワーカーの積極的活用などにより、学校における教育相談や組織的な取り組みを支援するとしていますが、中途退学であれ、不登校であれ、これを防止するための即効性のある処方箋はないと思っています。

肝心な事は、学校が、生徒達に学ぶ事の意味や学校で学ぶ楽しさを肌身に感じさせるだけのパワーを見せつける事です。少なくとも、どのような理屈を付けようと、義務感だけで子ども達を学校に縛り付けて置く事が難しい事は、はっきりしています。（塾頭：吉田　洋一）